

第2章

支援プログラムの ロジック・モデル作成

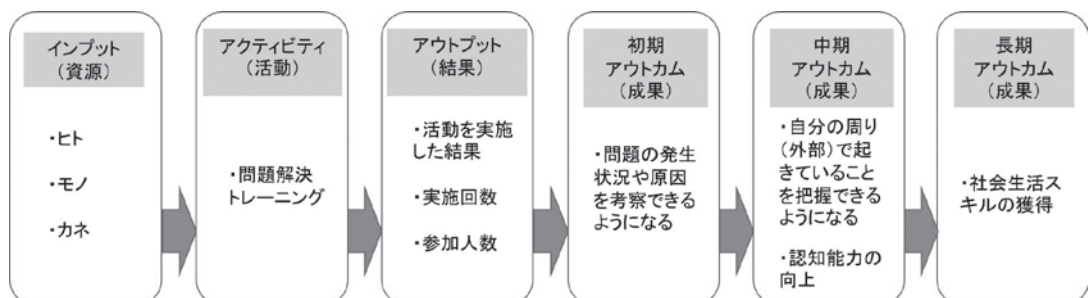
本章では、ロジック・モデルとは何か、またどのように作成していくものなのかということを説明しながら、実際にジョブカレの支援プログラム（以下、支援プログラム）のロジック・モデルを構築していく過程を確認していきます。

第1節 ロジック・モデルとは

ロジック・モデルは、「もし〜であれば、こうなるであろう」という仮説を立て、どのような道筋で目的を達成しようとしているのかを示したものです。事業が最終的に達成したい成果を上げるために必要な要素を体系的に図式化したものと言えます。一般的には、インプット（資源）、プログラム（活動）、アウトプット（結果）、アウトカム（成果）をツリー状に繋ぎ合わせて出来ています。

ロジック・モデルの特徴は、事業がどのような目的をもって取り組まれているか、その取り組みが目的達成に向けて効果を上げているのかを目で見て確認できるようになるということです。目的達成の計画づくりからその計画の進捗管理として活用できるものだと言えます。

【図4：支援プログラム（問題解決トレーニングの例）の流れに沿ったロジック・モデルの構成要素】



参考：GSG国内諮問委員会社会的インパクト評価ワーキング・グループ（2017）「社会的インパクト評価ツールセット実践マニュアル」p.8

図4は、支援プログラムの一つ、問題解決トレーニングを例にしたロジック・モデルの構成要素です。

【図5：ロジック・モデルの用語整理】

インプット(資源)	事業やプログラムを実施するための予算や人員	例) 人員3名、本、椅子、机 予算1万円
アクティビティ(活動)	事業やプログラムとして実施する活動	例) ○○プログラム、調理 実習
アウトプット(結果)	事業やプログラムを実施したことにより生じる結果	例) 年3回実施
アウトカム(成果)	事業やプログラムが対象にもたらした変化	例) ○○することができる ようになる

参考：GSG国内諮問委員会社会的インパクト評価ワーキング・グループ（2017）「社会的インパクト評価ツールセット実践マニュアル」 p.9

図5は、ロジック・モデルの用語をまとめたものです。

インプット（資源）

事業やプログラムを実施するための予算や人員を指します。

インプット（資源）は、ヒト・モノ・カネで表され、事業に必要な資源となります。資源はアクティビティ（活動）に制限をかけるので、あればあるだけ良いのですが、手持ちの資源をどのようにうまく活用するのかという視点が必要です。

アクティビティ（活動）

事業を通じて提供するサービス等を生み出すための具体的な活動を指します。

アクティビティ（活動）を通して、アウトプット（結果）を生み出します。各支援プログラムはアクティビティ（活動）ということになります。

アウトプット（結果）

事業を通じて提供するサービスや活動の直接の結果のことを指します。

アクティビティ（活動）から得られるとされる結果であり、各支援プログラムや直接的な支援の結果として得られるものです。

アウトカム（成果）

アクティビティ（活動）のアウトプット（結果）がもたらす変化や効果となります。アウトプット（結果）が受益者の状態や環境などにどう影響を与えたのかを指します。アウトカム（成果）は、初期→中期→長期といった流れで設定されることが一般的です。下位のアウトカム（成果）から上

位のアウトカム（成果）へ到達していくように設定します。

これらインプット、アクティビティ、アウトプット、アウトカムの因果関係を論理的に図式化したものがロジック・モデルとなります。

【図6：ロジック・モデル概念図】

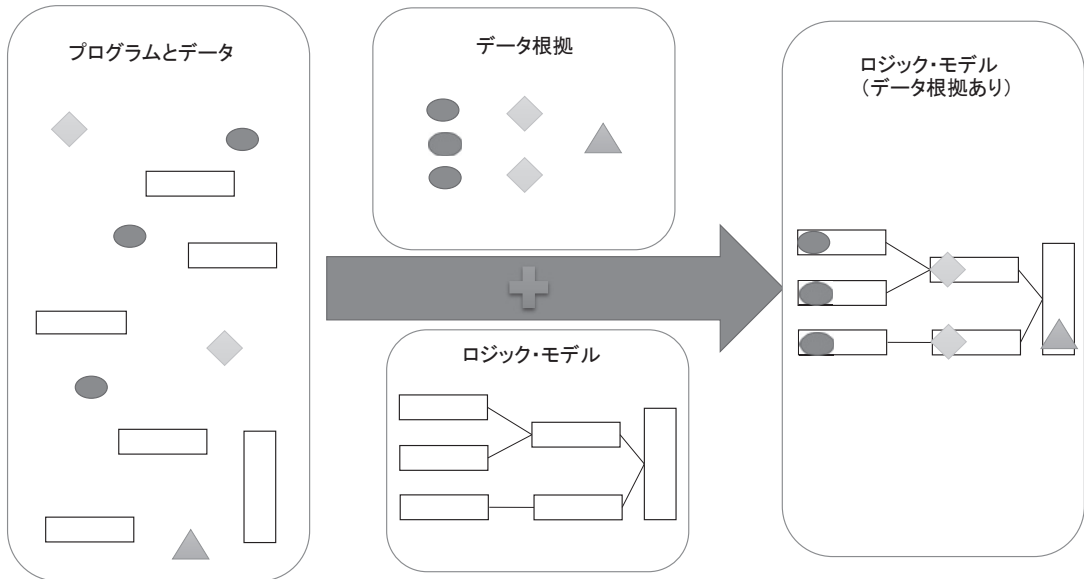


図6はロジック・モデルの概念図です。左端の「プログラムとデータ」については、本来、様々な因果関係や繋がりがありますが、関係性を意識しないと、それぞれが単独で機能しているように映ります。事業やプログラムを評価したり改善したりする上では、それぞれのつながりや関係性を把握する必要があります。ロジック・モデルを作成することで、右端の「ロジック・モデル（データ根拠あり）」のように因果関係や繋がりが、データが整理された状態となります。福祉サービスを評価する視点でいえば、「実施している支援やサービスがどのように利用者やその家族の生活の向上といった成果に繋がっているか」ということを「見える化」する必要があります。その方法としてロジック・モデルを活用することで、それぞれの関係性を整理することができるということです。しかし、ロジック・モデルはあくまで「仮説」として設定するものであり、それ自体があることが重要という訳ではありません。ロジック・モデルに正解があるという訳ではなく、作成されたロジック・モデルは、事業やプログラムが機能しているかどうかを客観的に検証し、協議していくためのツールとしてあるという認識が必要です。

【図7：ジョブカレ支援プログラム ロジック・モデル全体図（簡易版）】

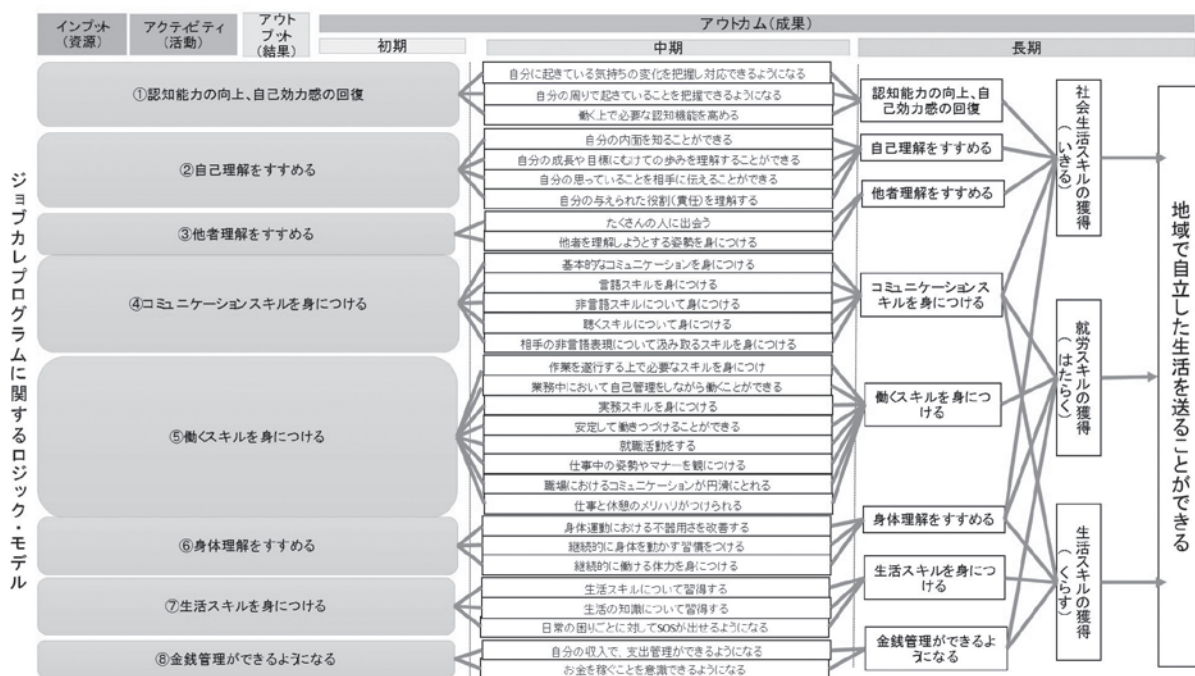


図7はジョブカレ支援プログラムのロジック・モデル全体図（簡易版）です。この図では、長期のアウトカムから初期のアウトカムまでのつながりが「見える化」していることが分かります。それぞれのアウトカムが関係し合いながら、下位のアウトカムから上位のアウトカムへと繋がりが、最終的には事業の目標である「地域で自立した生活を送ることができる」に繋がっています。（注：図7では、初期アウトカム、アウトプット、アクティビティ、インプットをまとめて表記しています）

これらのロジック・モデルの作成については、本書の第2章第3節第1項「プログラムの理論抽出」（p.18～）で触れていますが、ロジック・モデルによる全体図があることで事業の全体像が把握しやすくなります。また、アクティビティがどのようなアウトカムを期待しているのか、目標にむけたアウトカムは十分かなどを検討することができます。

第2節 ロジック・モデル作成の手順

【図8：ロジック・モデル作成の手順】



・事業をととして最終的に達成したい状況を設定します。

・事業目標から事業の受益者を明確にします。

・明確になった事業の受益者に対して、どのような成果を設定するかを検討します。

・設定したアウトカム(成果)に必要な、アウトプット(結果)、アクティビティ(活動)、インプット(資源)と順に検討します

・①～③を設定することで出来たロジック・モデルを確認していきます。

参考：GSG国内諮問委員会社会的インパクト評価ワーキング・グループ（2017）「社会的インパクト評価ツールセット実践マニュアル」 p.11

ここからはロジック・モデル作成の手順について説明します。

図8にある①～④の順でロジック・モデルを作成していくことが基本となります。

①事業の目標と受益者の特定

まずは、その事業の目標と受益者が誰かを検討します。事業の目標を設定するためには、事業をととして達成したい状況を考える必要があります。「その事業が目指す課題が改善された状態とは何か」ということの検討が必要です。また、事業の目標設定とともに事業の受益者を明確にしていきます。「事業の受益者とは、事業・プロジェクトの対象者をはじめ、事業を実施した結果の正の便益（＝利益）を直接・もしくは二次的に受ける対象者と定義しています。¹⁾」

ジョブカレ事業における事業の目標と受益者は以下のようになります。

【ジョブカレにおける事業の目標と受益者について】

事業の目標

地域で自立した生活を送ることができる

【地域生活スキルの獲得(いきる)、就労スキルの獲得(はたらく)、生活スキルの獲得(くらす)】

事業の受益者

プログラム参加者(利用者)

事業の受益者は必ずしも直接の対象者だけとは限られていません。複数である場合もあります。福祉サービスにおいても、事業の結果生まれる利益は利用者だけでなく、家族や支援者にも発生するかもしれません。最も影響のある受益者について具体的に検討し明確にしておくことが必要です。

②アウトカム（成果）の設定

次に、明確になった事業の受益者に対して、どのようなアウトカムを設定するかを検討します。アウトカムは3段階（長期、中期、初期）で設定されることが一般的ですが、必ずしも3段階で設定しなければいけないということではありません。また、現実的には直接的な因果関係で説明できるものは少なく、ロジック・モデルはあくまで単純化するツールであるということを意識しておく必要があります。アウトカムの設定については、長期アウトカムから設定していきます。先に設定した事業目標を達成するために、どのようなアウトカムが必要になるかを事業目標から検討します。

例えば、ジョブカレの事業目標は、「地域で自立した生活を送ることができる」です。また、そのためには「地域生活スキルの獲得（いきる）、就労スキルの獲得（はたらく）、生活スキルの獲得（くらす）」が必要とされています。

事業目標から長期アウトカムを設定した後は、続いて中期アウトカム、初期アウトカムと、それぞれ上位のアウトカムに到達するために必要なアウトカムを設定していきます。

③アウトプット（結果）、アクティビティ（活動）、インプット（資源）の設定

設定したアウトカムに必要な、アウトプット、アクティビティ、インプットを検討していきます。初期アウトカムの設定に対して、どのようなアウトプットを生み出すことができるかを考えます。つまり、受益者にどのようなアクティビティがあればアウトカムに結びつくアウトプットを生み出せるかということです。アクティビティとアウトプットが設定できれば、次はアクティビティに必要な予算や人員などを検討し、インプットを設定していきます。

④最終確認

ロジック・モデル作成手順①～③まで進めるとロジック・モデルは出来上がります。最後は確認となります。以下の確認事項において最終確認をしていきます。

- ☐ロジック・モデルの各要素に関係ない項目はありませんか。
- ☐重複している箇所はありませんか。
- ☐作成したロジック・モデルは、現実的実行可能なものですか。
- ☐設定したアウトカム（成果）を起点とした時、インプット（資源）、アクティビティ（活動）、アウトプット（結果）の各要素が論理的に繋がりますか。

参考：GSG国内諮問委員会社会的インパクト評価ワーキング・グループ（2017）「社会的インパクト評価ツールセット実践マニュアル」p.19

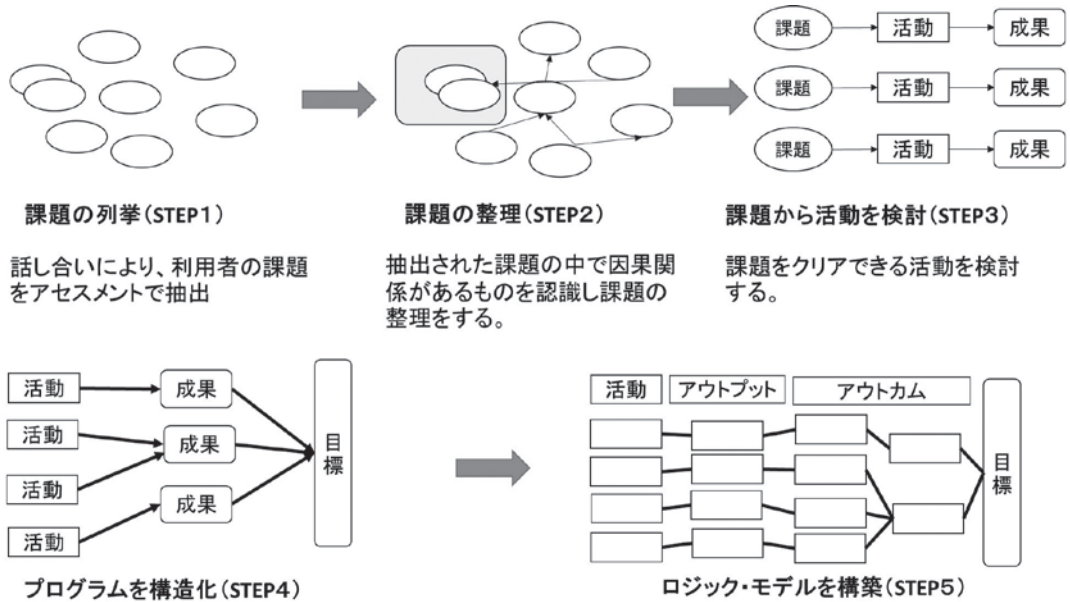
ロジック・モデルはあくまで「仮説」なので、実際の事業や活動を行う中で検証し、定期的に見直し、修正していく必要があります。ロジック・モデル作成時にはアウトカムに結びつくと考えていたアクティビティも、実際にはそうでない場合もあります。その場合は、その事業やアクティビティの修正、廃止等を検討する必要があります。しかし、ただ単純に修正や廃止をするのではなく、どのようにすればアウトカムに繋げることができるかを検討し、改善や新しい活動を生み出していくことが重要です。

第3節 ジョブカレ支援プログラムのロジック・モデル作成

第1項 プログラムの理論抽出

ここからは、支援プログラムの理論抽出を経てロジック・モデルを作成する過程について説明をします。

【図9：プログラムの理論抽出からロジック・モデルを構築】



新しくプログラムの開発をする場合は、前節のロジック・モデル作成手順（図8）にあるように長期アウトカムから遡りながらロジック・モデルをつくります。

一方、既に開発されたプログラムの場合においては、①プログラム理論の抽出②ロジック・モデルで表現③既存資料の分析、ステークホルダー（利害関係）・ヒアリング、実際の観察、の手順でセオリー評価ⁱⁱ⁾を行うことでロジック・モデルを作成します。ⁱⁱⁱ⁾

ジョブカレ事業においては、既に支援プログラムは開発されています（p.7-8図2：ジョブカレの支援プログラム参照）。まずは、プログラムの理論抽出をしていく必要があります。

ジョブカレ支援プログラムは、図9のSTEP1～STEP3の過程でプログラムが考えられています。アクティビティとアウトカムが既に明確なため、まずは支援プログラム内容（図2）から理論抽出をしていきます。抽出することで、図9のSTEP3「課題から活動を検討」にある活動→成果の因果関係についても見えてきます。

【再掲 図2：ジョブカレの支援プログラム（一部抜粋）】

（プログラム内容）

分類	プログラム名	概要・指導文庫 目的・効果
習熟活動	朝のヨガレ	1日1つずつ、認知トレーニングを行い、注意力、感情コントロール、危機認知、人との関わり、問題解決、身体を強く保つことを身につけていく。
	今日の新聞	自分の気になった新聞記事を選択して要約する。
	パシオン練習	自分の興味を知り、それを人に伝える。文章をまとめることで認知機能を高める。
	ワークサンプル	エッセイ、ワード、パワーポイント等を練習する。
	ワークサンプル	文字入力、エッセイ、ワード、パワーポイントを各人のレベルに合わせて練習し、就労に出す。
生活実践プログラムの一部		OA作業、事務、自立等
		業務訓練を行なう。
		読書美習のための話し合い、下調べ、スケジュール組み立て等。
	読書美習準備（読書にありつたおに）	何をやるのか話し合う中で、自分の意見を相手に伝える。相手の意見を聞く。前次、意見が強い通ったときの相手の言い合いについて、気持ちを整理するための学習をする。他者と協力しながら作り出す下調べや、手立て、スケジュールの組み立て、役割分担を行なう。
	読書美習（作って読べよう）	話し合っって決めたテーマを実践し、読書する。
	読書美習（作って読べよう）	自分の役割、自分の役割をこなす。かつ関わりをしながら動く。手際よく作業する練習。他者と一組で食事をするときのマナーを学ぶ。
	ヨガレ（身体を知らう）	「先輩市などからへの認知作業トレーニング」
	ヨガレ（身体を知らう）	身体を使い方の苦手な部分を知る。身体の内側から力を訓練する。
	あたまの体操	「ヨガレ みんなく」を練習するための認知機能強化トレーニング」
	あたまの体操	「読書で使えるヨガレ」
生活実践プログラムの一部		認知機能（記憶、言語理解、注意、知覚、運動・知覚）をのびるトレーニング。
	みんなでお金しよう！お宝探し	みんなでお金することを企画、計画する。
	みんなでお金しよう！お宝探し	何の活動をするか決めて行なうのかを話し合う中で、自分の意見を相手に伝える。相手の意見を聞く。前次、意見が強い通ったときの相手の言い合いについて、気持ちを整理するための学習をする。他者と協力しながら作り出す下調べや、手立て、スケジュールの組み立て、役割分担を行なう。
	みんなでお金しよう！お宝探し	みんなでお金、計画したことを実行する。
	生活実践を学ぶ	自分の役割を果たすことを学ぶ。実践行動を行なう。仲間活動の体験。
	生活のあれこれやってみよう	生活管理、インターネットの使い方、社会資源の活用、クリーニング等生活するうえで必要なことを学ぶ。重要な経験、体験を身につける。
	生活のあれこれやってみよう	生活するために必要なスキルや方法を学ぶ。
	生活のあれこれやってみよう	課題より大層なことを学ぶ。
	太極拳	自分の身体を知る。感じる。特定の動きを真似ることによって認知機能を高める。
	スポーツ（運動しよう）	スポーツ
リラクゼーション	スポーツ（運動しよう）	体かづいて、身体を動かすことを楽しむ。チームプレーを行なう。
	リラクゼーション	リラクゼーション（リラクゼーション）のためのリラクゼーション（リラクゼーション）

作業	お金を稼ぐとは？	内職（シール貼り等）下（下）作業
	お金の稼ぐとは？	実際の作業を通して、ほうれんそう等栽培した際に必要なスキルを身につける。集中して作業に取り組み、仕事をしてお金を稼ぐということを体験する。仕事をすることのイメージを作る。
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
コミュニケーション	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
コミュニケーション	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
コミュニケーション	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
コミュニケーション	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？
	お金の稼ぐとは？	お金の稼ぐとは？

例えば、「スポーツ（運動しよう）」という活動については、「身体を動かすことを楽しむ」ことができるという成果を期待しています。この支援プログラムは、教材を使用するというだけではなく、その時々様子から具体的な内容を変更することで成果につなげようとしています。一方で、「問題解決トレーニング」という活動については、「問題発生状況や原因を考察できる」という成果を期待しています。これには、「発達障害者のための問題解決技能トレーニング」^{iv)}が教材となり、教材がもつプログラムの結果やねらいが根拠になっています。

【図10：プログラム内容からアクティビティとアウトカムを抽出】

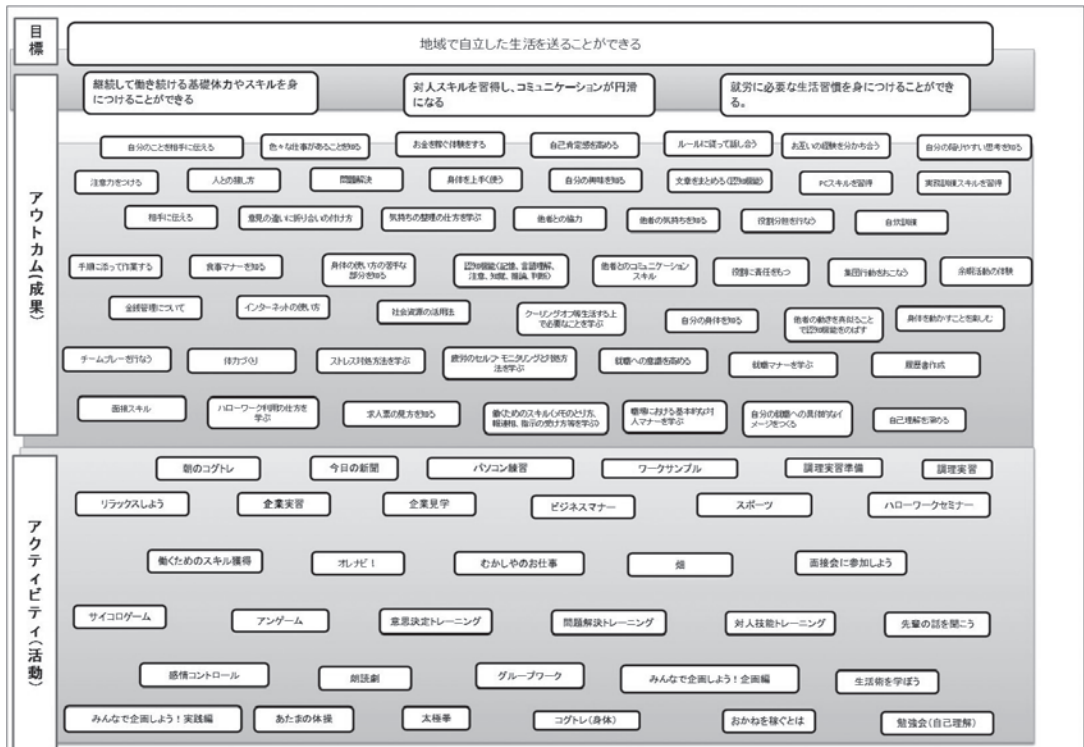
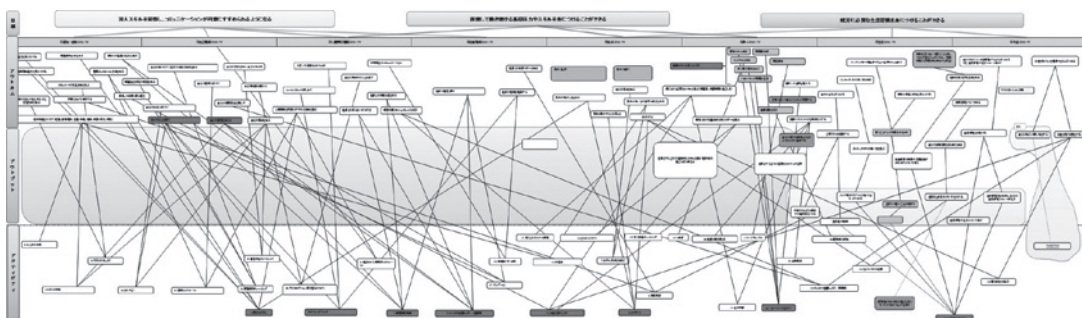


図10は、プログラム内容からアクティビティとアウトカムを抽出したものです。ジョブカレ事業は、「地域で自立した生活を送ることができる」ということを開設当初から目標にしています。その目標をより具体的に「社会生活スキルの獲得（いきる）、就労スキルの獲得（はたらく）、生活スキルの獲得（くらす）」を身につけられるようにとプログラムが設定されています。また、事業の受益者は「プログラム参加者（利用者）」となります。

このように、「事業の目標と受益者の特定」については既に明確になっているため事業の重要な基礎部分の抽出ができます。一方、多数のアクティビティとアウトカムが抽出されることから、各アウトカムが繋がっていく上位のアウトカムについて整理をしていくことが必要となります。

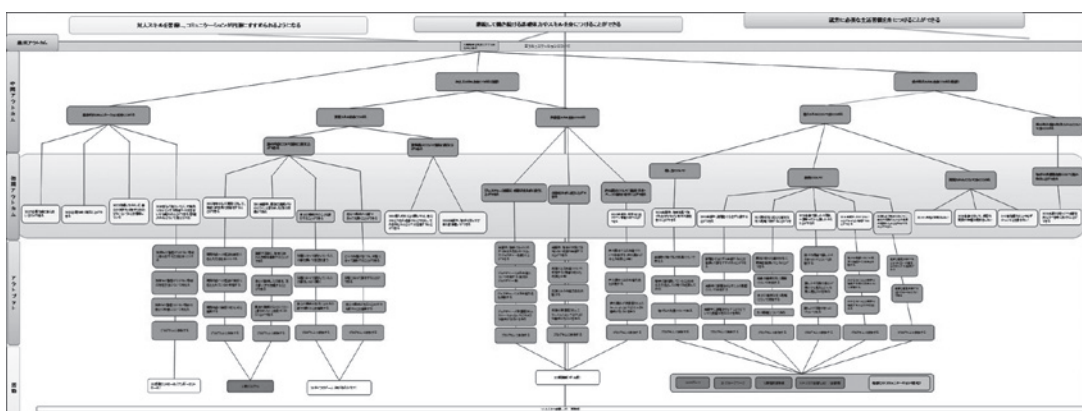
【図11：STEP4 プログラムを構造化】



アクティビティとアウトカムの抽出の次は構造化となります（STEP4）。

図11では、アクティビティからアウトカムにむけての因果関係を線で繋ぎ合わせることで、つながりの「見える化」をはかりました。この段階では、つながりは見えていますが、それぞれの関係性が見えにくい状況です。また、アクティビティからアウトカムにむけてのアウトプットもわからない状況です。構造化された1つ1つのつながりのロジックを、明確にしていくために、次の段階（STEP5 ロジック・モデルを構築）で整理していきます。

【図12：STEP5 ロジック・モデルを構築（一部抜粋）】



ロジック・モデルを構築するために、アウトプットを抽出しました。アウトプットの抽出には、ジョブカレにおいて作成されていたスキル評価シートを用いました。このスキル評価シートは①就労移行のための総合支援シートと②ひとり暮らしへの移行のための総合支援シートとしてまとめられています。ジョブカレ利用開始時から評価項目としてこれらのシートでアセスメントをし、個別支援計画が作られています。

スキル評価シートにあるアセスメント欄や支援内容、定期的なモニタリングの評価の詳細などから、アウトプットのプログラムの理論抽出ができました。また、プログラム作成者からの聞き取りにより、プログラム作成時のねらいや成果等を確認し、ロジック・モデルがよりプログラム作成者の意図に近づくように試みました（STEP5 ロジック・モデルを作成）。アウトプットのプログラムの理論抽出によりアクティビティが期待する本当のねらいが見えてきます。アクティビティの

中には、複数のアウトカムを求めたものもあり、その道筋が本来のねらいどおりに機能しているかということも見え、プログラムの論理的なつながりを整理することができます。

これらのプログラムの理論抽出の過程を経て、ジョブカレ事業における支援プログラムのロジック・モデルを作成しました。

【再掲 図3：ジョブカレのスキル評価シート（一部抜粋）】

就労移行支援のための総合シート

所必要な部分を取り出してプリントアウトします。

※個別支援計画・モニタリングシートとして取り出す場合は、作成年月・作成者・本人同意書欄を添付します。

スキル評価シート

	領域	項目	基準	個別支援計画・モニタリングシート（1クール目：平成29年 9月～平成29年 11月）					
				アセスメント		支援内容	モニタリング		備考
				支援量	評価の種類		支援量	評価の種類	
1		交通手段	何らかの手段を使って自分で通勤することができる。	1	出来る。				
2	出勤	欠席等の連絡	欠勤・遅刻等の連絡をすることができる。	3	携帯電話が壊れており、公衆電話から連絡するよう伝えるも連絡が難しいことが多い。メール連絡が出来ないようにしてから連絡が来る。	引越メールでの連絡がきんちと行なうよう促す	4	午後休で職員が訪問した際に、体調不良で欠席することを伝えられるが、自らメールで連絡することはない。	
3		出勤状況	毎日出勤することができる。	4	朝からの出勤は無く、9月12日（月）午後から、2回15時以降に出勤される。出勤出来ない場合は「行く気がない」「出勤しようと思ったが体が抱かない」等の理由が多い。向プログラムに参加できたのは3回。	午後の退席の取扱いに、出勤を促す。定時退席の際に出勤状況を伝わり、毎日出勤することが目標（就職）達成に向けていっから一緒に確認していく。	3	10月に午後の退席を開始したところ、午後から出勤できることが増えてきた。ただ、自ら集合場所にいることはなく、出席すると出てくることできる。11月中旬から体調不良で欠勤が増えていく。	
4		働く場のルール理解、遵守	働く場のルールを理解し、それに従うことができる。	1	出来る。				
5		指示の受け入れ①	上司からの指示に従うことができる。	1	出来る。				
6*		指示の受け入れ②	注意や指示・助言等をされても感情的に反発しない。 （原文：注意や指示・助言等をされても感情的に反発したり、ふてくされたりしない。）	1	出来る。				
7	指示・指示系統の理解	柔軟性	理由を伝えれば、急な予定変更にも応じることができる。		場面なし		1		

上図はスキル評価シートの一部を抜粋したものです。項目「欠席時の連絡」において、欠席や遅刻の際に連絡がないことが課題として挙がっています。その課題に対しての、アセスメントや支援内容、モニタリングの評価の詳細を見ると「連絡をすることを促す」や「欠席理由を伝えること」、「時間への意識」などが評価のポイントとなっていることがわかります。このような記録等から、アウトプットのプログラムの理論を抽出していきました。

第2項 ロジック・モデル（完成版）

前項では、プログラムの理論抽出により、ジョブカレの支援プログラム（以下、支援プログラム）のロジック・モデルを作成しました。繰り返しますが、ジョブカレの事業目標は、「地域で自立した生活を送ることができる」となっています。また、そこには「地域生活スキルの獲得（いきる）、就労スキルの獲得（はたらく）、生活スキルの獲得（くらす）」という事業目標に到達するための長期アウトカムが設定されています。ロジック・モデルを作成する前は、その長期アウトカムを達成するために初期アウトカムとアクティビティが設定されているという構図となっていました（p.21 図11）。

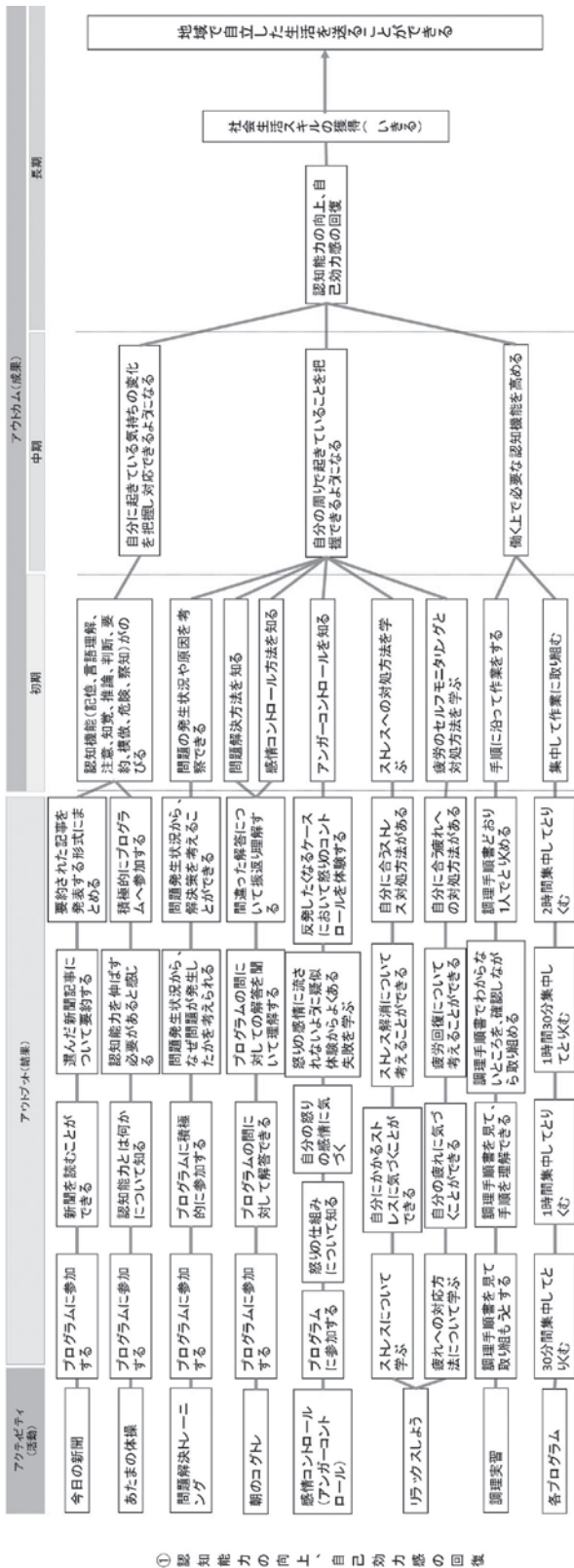
ロジック・モデルを作成することで、支援プログラムの構成要素や因果関係について図式化され、見えていなかったアウトカムやつながりについて整理をすることができました。作成した支援プログラムのロジック・モデルでは、長期アウトカムを以下の8つに分類して抽出しています。

- ①認知能力の向上、自己効力感の回復
- ②自己理解をすすめる
- ③他者理解をすすめる
- ④コミュニケーションスキルを身につける
- ⑤身体理解をすすめる
- ⑥働くスキルを身につける
- ⑦生活スキルを身につける
- ⑧金銭管理ができるようになる

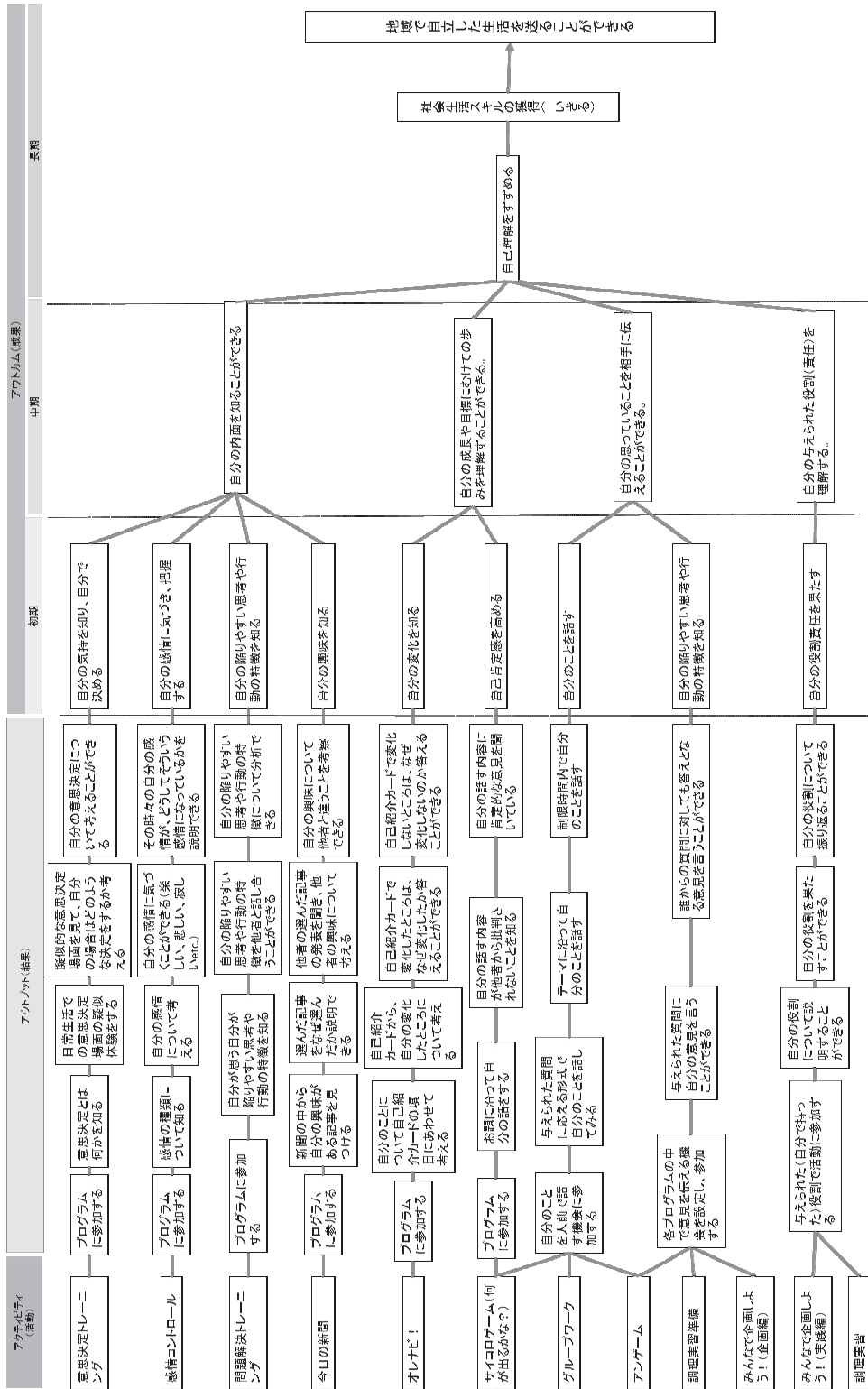
また、本章の後半で考察していくのですが、アクティビティからのアウトカムについては、一般的なロジック・モデルのアウトプットの記載とは少し違います。本来であれば、内容や回数などが記載されることとなりますが、支援プログラムのロジック・モデルは数値化できないことも多く見られます。よって得られるアウトプットをスモールステップで抽出することで、その結果の進捗をアウトプットに反映するということになります。

次ページ以降で①～⑧に分類された支援プログラムのロジック・モデルについて確認していきます。

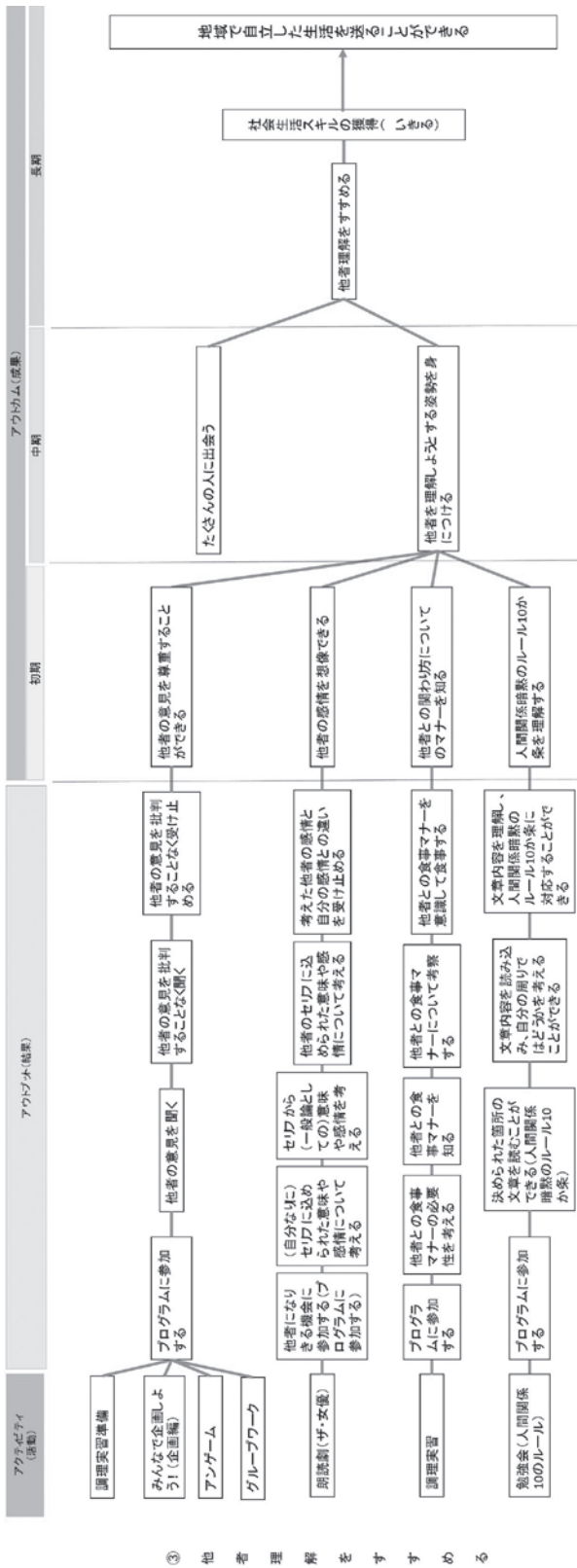
【図13：①認知能力の向上、自己効力感の回復のロジック・モデル】



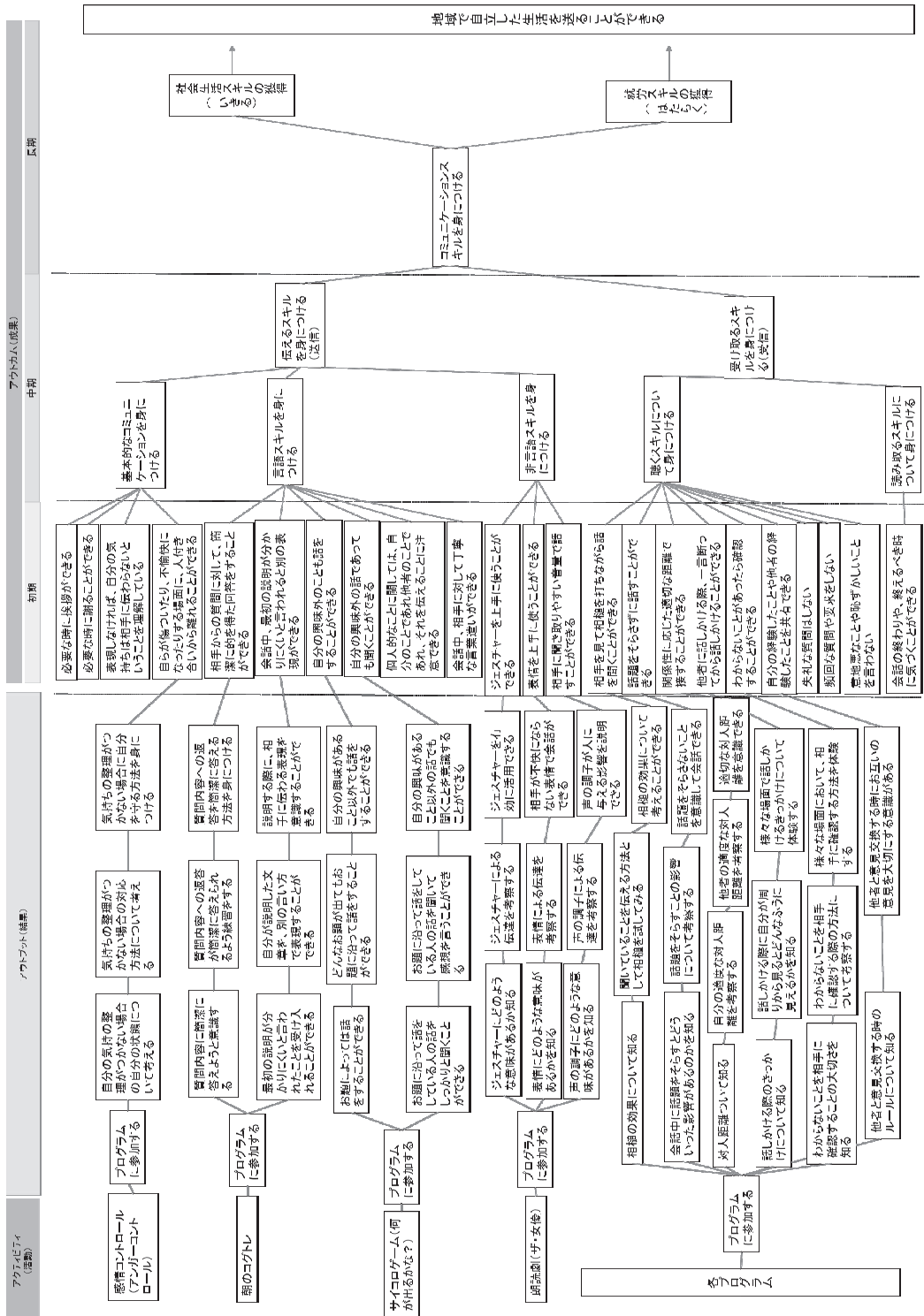
【図14：②自己理解をすすめるのロジック・モデル】



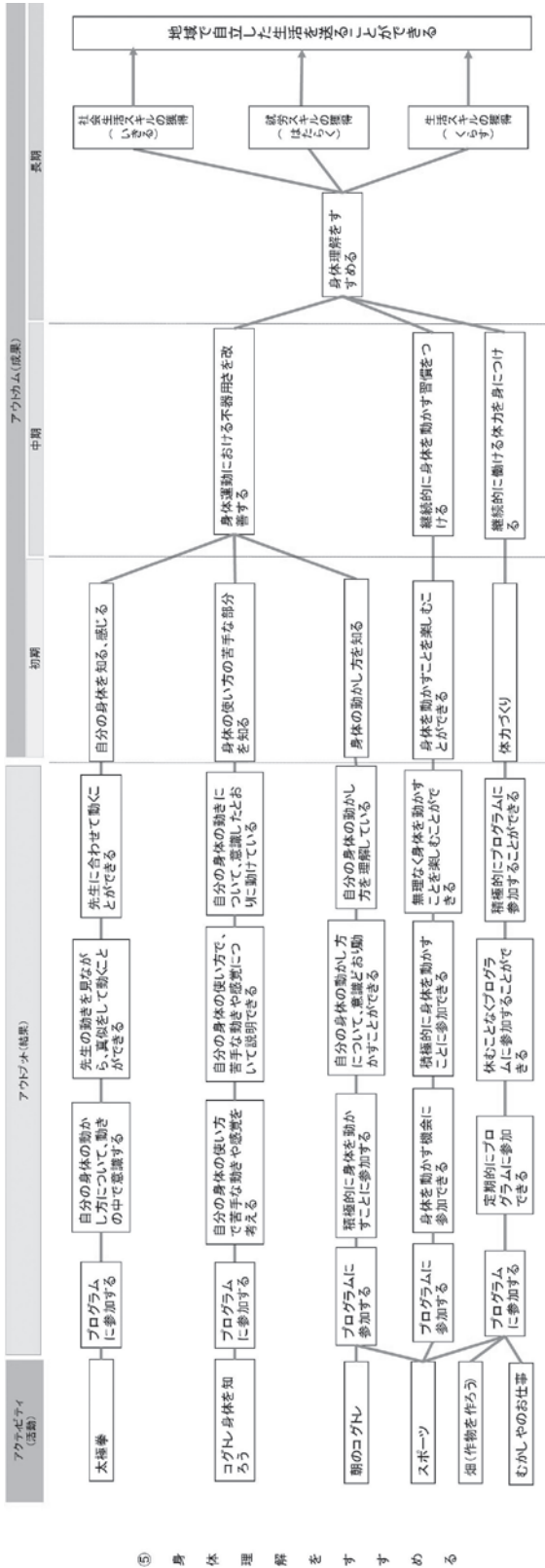
【図15：③他者理解をすすめるのロジック・モデル】



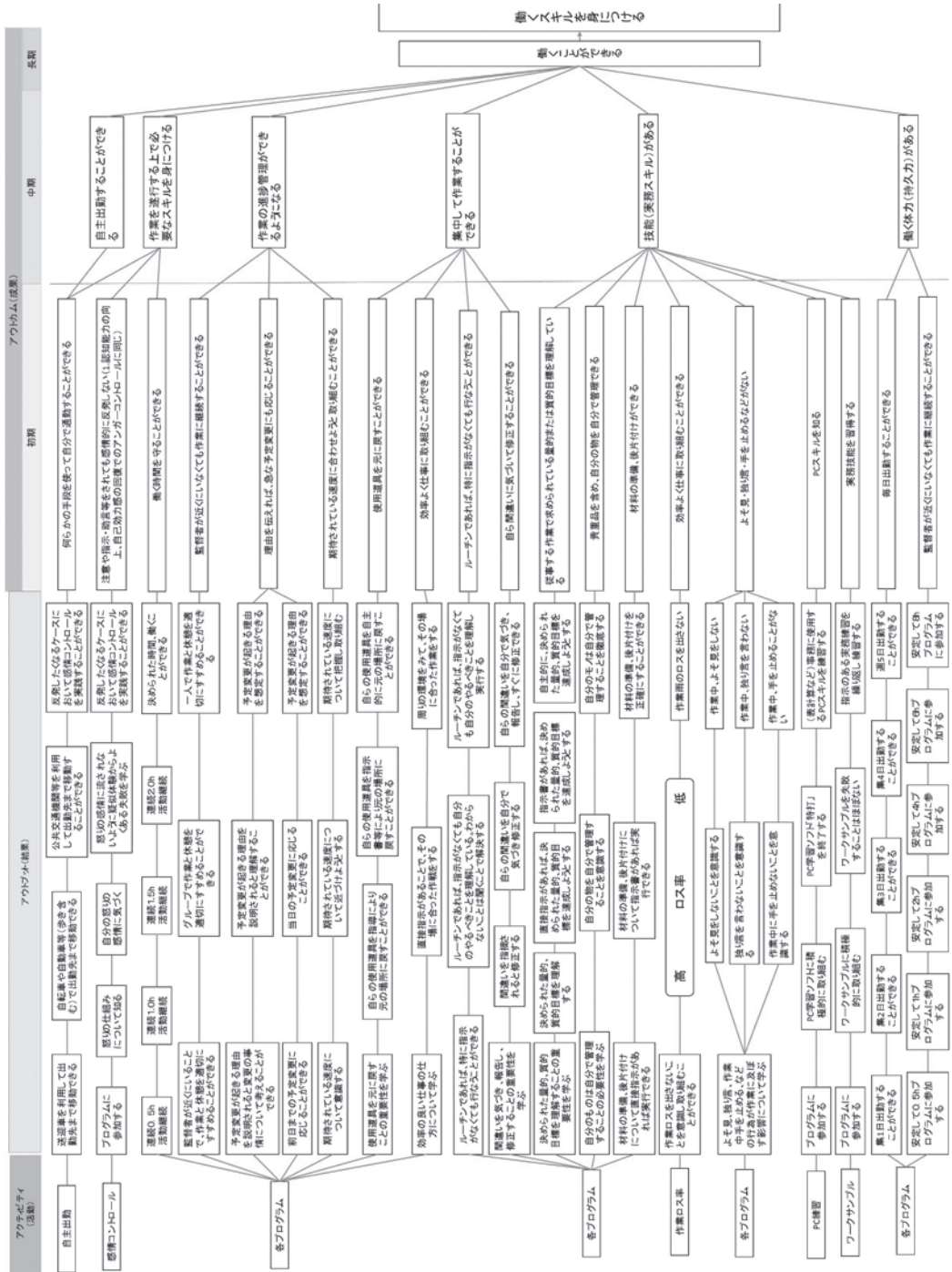
【図16：④コミュニケーションスキルを身につけるのロジック・モデル】



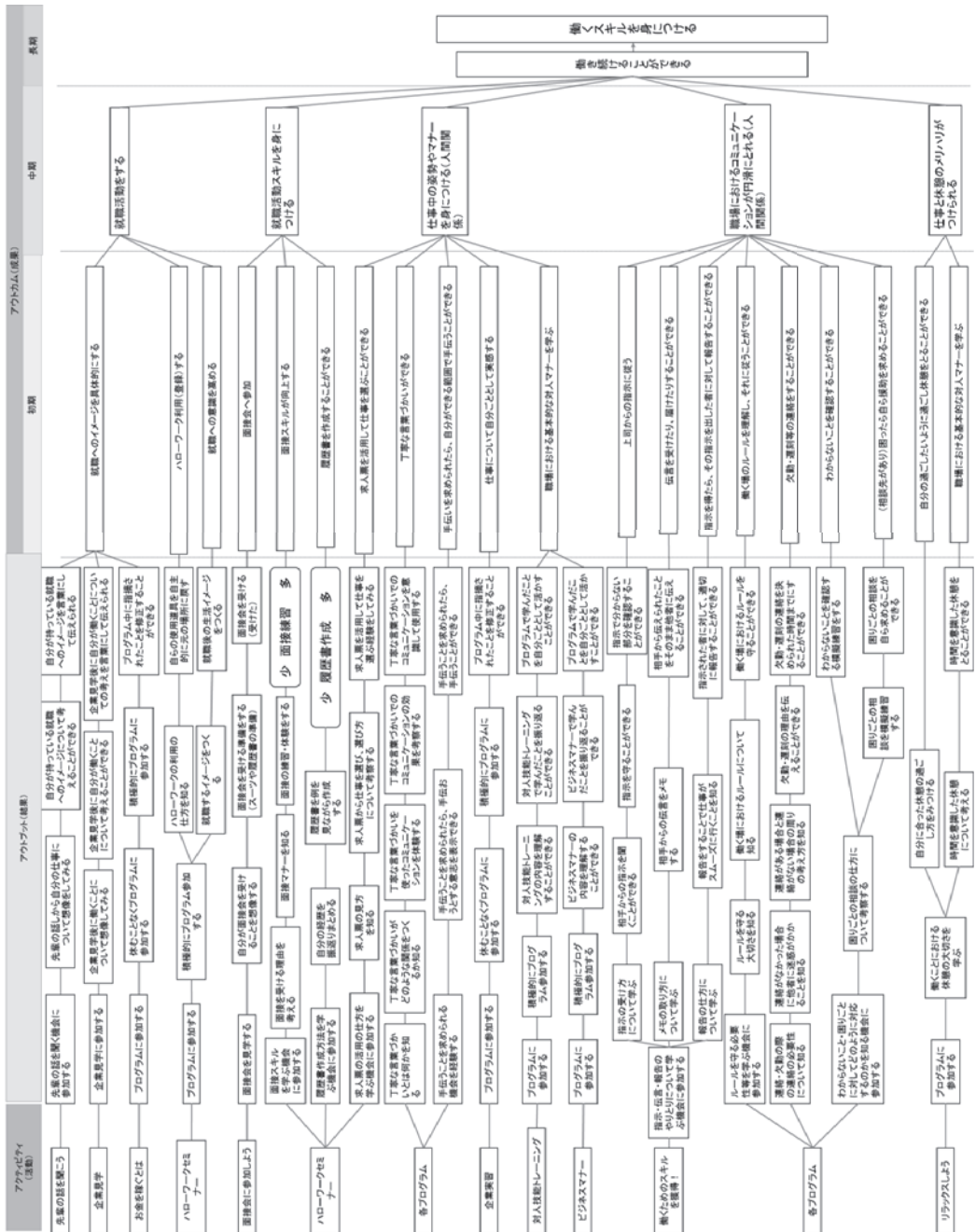
【図17：⑤身体理解をすすめるのロジック・モデル】



【図18：⑥働くスキルを身につける1のロジック・モデル】

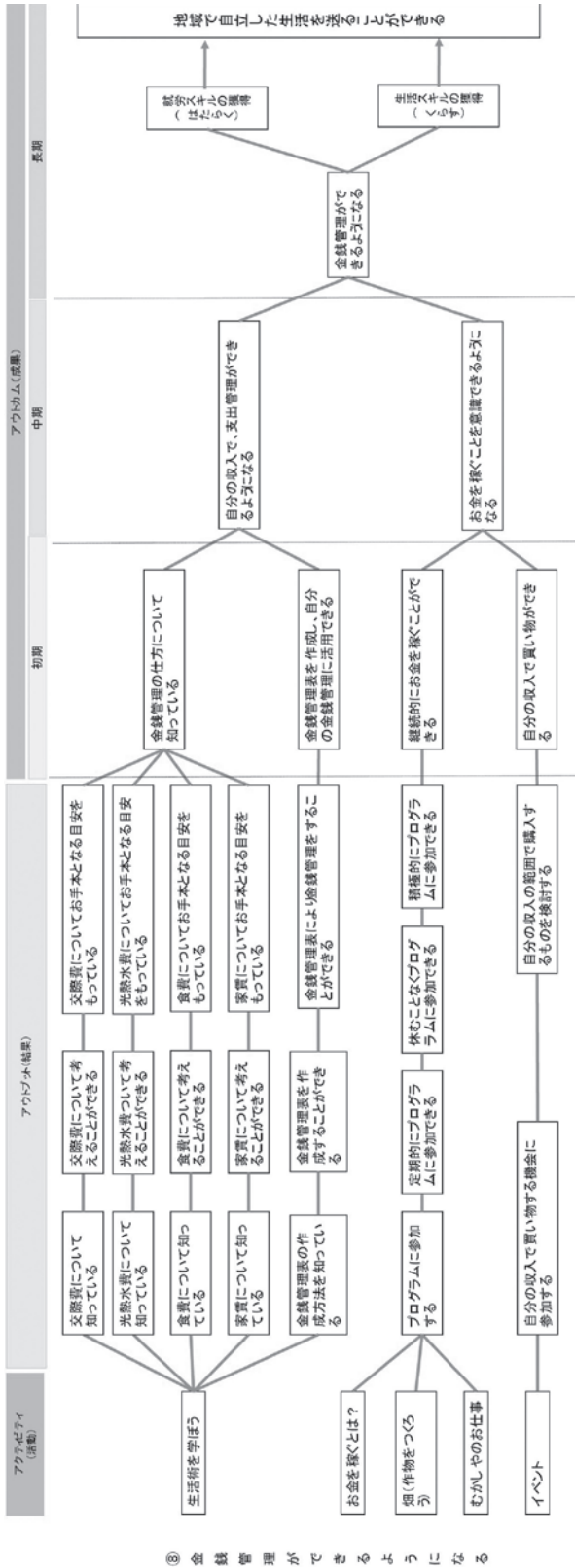


【図19：⑥働くスキルを身につける2のロジック・モデル】



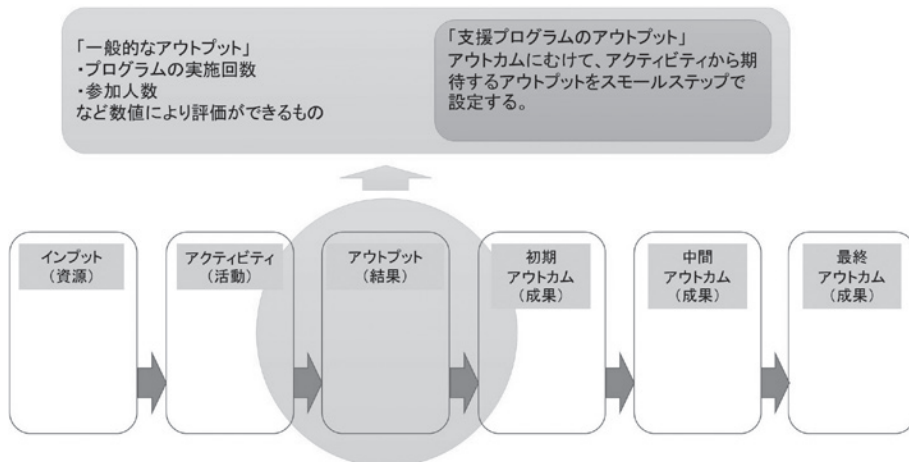
[illegible]

【図21：⑧金銭管理ができるようになるのロジック・モデル】



第4節 支援現場でのアウトプットとアウトカム

【図22：支援プログラムのアウトプット】



前節では、支援プログラムのロジック・モデル（完成版）を確認しました。ロジック・モデルは、「なぜ、このアクティビティを実施しているのか」「どのようなステップや進捗があるのか」「どこでつまづいているのか」ということが分かるものです。特に福祉サービスの支援者にとっては、アウトプットの項目やつながりは、日々意識していることではなかったでしょうか。アウトプットからアウトカムへとつながる変化のスモールステップは、個人やその周辺環境を把握し理解しようとするアセスメントの視点がないと設定できません。人の考えや行動の変化が数値による測定や設定をすることが難しい以上、期待するアウトカムへの進捗管理をスモールステップで設定することが必要です（図22）。

次に、構成要素の中でもアウトカムの部分は特に重要となります。アウトカムは、「対象としていいる受益者がどのような状態になるか」など、自分たちではなく受益者にフォーカスしたものになります。これは福祉サービスにとって本質的なことであり、一番大切なところでもあります。受益者に確実にきちんとした支援が届いていなければ意味がありません。その意味で、ロジック・モデルのアウトカムの部分をしっかりと考え抜くということはとても重要だと言えます。また、ロジック・モデルを作成してみると、事業やプログラムの中身や過去と未来を考えなければならなりません。普段の支援に夢中になると、どうしても自分たちの支援についてじっくり振り返る機会は減ってしまいます。具体的に、いざ振り返りをしてみようと思っても、何から考えれば良いのか分からないことも多いでしょう。ロジック・モデルは、考えるための道筋を示してくれるという意味でも良いツールとなります。

i) GSG国内諮問委員会社会的インパクト評価ワーキング・グループ（2017年）

『社会的インパクト評価ツールセット実践マニュアル』（p.11）

ii) セオリー評価とは、「投入→活動→結果→成果」という言わば「投・活・結・成」という一連の流れを明らかにする評価である」（引用：龍慶昭・佐々木亮（2000年）『「政策評価」の理論と技法』）

iii) 詳細は、李玲珠（2016年）『福祉分野におけるセオリー評価の活用可能性』（評論・社会科学=Hyoron Shakaikagaku (Social Science Review) (118) p.1-12 同志社大学社会学会）を参照

iv) 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構 障害者職業総合センター職業センター（2013年）